



第二回

子どもが夢中になる 授業の「コツ」

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



「先生。今の授業、すごくおもしろかったよ。パワフル算数だった」。初任者の教室です。そこには、全力を出し切った子どもたちの充実感と先生の笑顔がありました。わたしはほほえましい思いでいっぱいになりました。

いよいよ、これまで学習した内容のまとめの時期に入りましたね。冒頭のような感動がある一方で、「授業で子どもが思うように動いてくれない」というような悩みも聞こえてきます。そこで今回は、充実した授業にするために大切なことは何かということ、考えてみたいと思います。

○発言する子を増やしたい

発言する子が限られているので、発言する子をもっと増やしたいと願う先生は多いと思います。それには、教室を発言

しやすい雰囲気にすることが大切です。問題を解いていて、わからない子に「そんなの簡単、簡単」「そんなこともわからないの」などと言う子どもはいませんか。そして、そうした声を放置していいでしょうか。注意や叱責をせずに、こうした声はなくすようにしたいものです。どうしたらよいでしょうか。

例えば、算数の自力解決で、かけ算で解く問題をたし算で解く子がいたとします。そうしたら、「ああ、この解き方なら、かけ算を知らなくても解けるね」などと言って受容してあげます。つまり解き方の多様性を日ごろから大事にするのです。そうすれば、子どもも多様な考えが身につく、稚拙であってもその解き方を受け入れ、それぞれの解き方のよさを考えるようになるでしょう。もちろん練り上げの段階では、「かけ算を覚えていれば、速くて便利」ということが押さえられなければいけません。

また、内気だったり自信がなかったりして、発言がほとんど聞こえない子どもに、「聞こえません。もっと大きな声で言ってください」と言う子どもはいませんか。これもそのまま放置すると、言えなくなる子が出てしまうでしょう。そこで、教師がそばに近づいていったらどうでしょう。その子の発言を皆に伝えてやればよいのです。

教師が、子ども一人ひとりを大切にす

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のホームページ」でブログを執筆中。

る姿勢をもつことによって、子どもには安心感が生まれます。そうして、声が大きくなったら、「うわあ。もう、そばに行く必要はなくなったね」と絶賛してやります。

他に、珍答・誤答などを笑う子がいるかもしれません。これは、これまでの話と少しニュアンスが違います。よく、「教室は間違えるところだ」と言って、笑う子どもを注意する先生がいます。わたしは本当におかしければ、笑うのは自然だと思えます。言った子も聞いた子も一緒になって笑い合えるような雰囲気にしたと思います。いけないのは嘲笑のたぐいでしょ。しかし、これも、注意や叱責によらないでなくしてほしいものです。

○発問の工夫を

発言する子を増やすには、開かれた発問と閉じられた発問を意識するのもよいでしょう。

開かれた発問とは、「賛成／反対」など、自分の思い・考え・疑問などを子どもが自由に答えられる発問です。それに対し、閉じられた発問とは、「イエス／ノー」で子どもに答えさせる発問です。正解はひとつなので、答えてしまえば終わり。そこから話は続きません。ですから、教師は次々と発問しなければならなくなり

ます。この双方を組み合わせると発問するとよいでしょう。

○多様な活動を

子どもの発言を増やす努力を中心に書いてきましたが、授業に意欲的に取り組ませるにはどうしたらよいでしょうか。授業には、「遊び・体験・実技・制作」など、多様な活動があります。これらをうまく組み合わせることも大切です。

特に低学年で話し合いを一時間続けることは、無理な場合が多いでしょう。そういう時間が長ければ、身体を動かす活動を取り入れます。また、逆に運動したり歌ったりする授業でも、そればかり続けていたら、単調になってしまいます。運動や歌の時間を充実させるためには、先生の賞賛や感動の言葉かけが必要です。ほんの数分間でよいので、話し合いがあってもよいでしょう。そうして活動に変化をつけることが大切です。

また、活動したあと、創ったもので遊んだり作品を鑑賞したり活動を反省したりして、それが次の活動をよりよくするというように、活動が「行きつ戻りつ」になるようにすることも大切です。

そこで留意したいことは、子どもの活動の見取りと、見取った後の声のかけ方です。これも、賞賛や感動の言葉かけを中心に行います。しかし、注意や助言をし

たくなったらどうしたらよいでしょう。できるだけ最小限にとどめるとともに、できている子を探すことです。その子をほめることを通して、その広がりを与えます。そのようにして、子ども主体の授業への取り組みをねらってください。

○授業研究の機会を大切に

授業は、奥の深いものです。どうぞ、授業研究を積み重ねる中で、講師や先輩の先生の指導や助言をいただきながら、日々よりよい授業を目指していただきたいと思えます。

